競馬生き生きと 絵馬復元

山鹿市・豊波神社　明治期制作「地域の宝」

明治時代の競馬を描いた山鹿市中の豊波（とよは）神社の絵馬が2年がかりの修復を終え、5日の例大祭で奉納された。復元した崇城大芸術学部の中村賢次教授(55)は「上流階級の娯楽だった競馬が庶民に広まった過程を伝える全国でも珍しい史料」と話している。

絵馬は縦60センチ、横2メートルの杉板製。神社の拝殿に飾られ、風雨や日光にさらされて絵の具がほとんど剥げ落ちていた。2010～14年の神社再建に合わせ、社殿を設計した崇城大工学部の内丸惠一講師(60)が中村教授に修復を依頼。16年から教え子らと作業してきた。

よみがえった絵馬には、神社が立つ双子塚の周りを5頭の馬が走る様子が描かれている。制作は1890（明治23）年と判明。騎手は帽子や靴を身に付け、西洋式競馬の影響がうかがえる。

中村教授は「明治に入って東京の靖国神社が競馬を一般に公開し、徐々に庶民に広まっていった。錦絵では盛んに描かれたが、絵馬では他に例がない」という。

中坂征孝区長(73)は「この辺りで競馬があったという言い伝えを裏付ける貴重な地域の宝。将来は市の文化財に指定してほしい」と話していた。

（河内正一郎）

絵馬には、競走する馬と騎手が生き生きと描かれている。地元住民によると、奥の丘は豊波神社が立つ双子塚という＝5日、山鹿市

修復を終えた豊波神社の絵馬と地元住民ら

2018年10月6日　熊本日日新聞　P.26